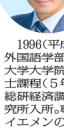
防研セミナー

時代を読み解く

シリーズ 18

今月の講師



吉田 智聡氏（よしだ ともあき）

防衛研究所　理論研究部

社会・経済研究室研究員

1996（平成８）年生まれ、奈良県出身。大阪大学外国語学部外国語学科アラビア語専攻卒、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程（５年一貫制）退学。修士（地域研究）。大和総研経済調査部研究員を経て、2021年、防衛研究所入所。専門は中東地域研究（両学術誌掲載）および「イエメンの国際関係・全体視点」論文にて「イエメン――戦争と海上戦力」（『海幹戦略研究』第13巻第１号、23年６月収録）など。

イラク戦争後の中東政治の20年

イラク戦争から20年が経過し、中東政治の景色は大きく変わった。イラクの没落、エジプトやシリアといった地域大国も内政課題への対応を優先してきた。こうした中で台頭したのが、イランとサウジアラビアである。

イランは、2001年の同盟関係であった米国と中東地域において軍事的衝突を辞さない姿勢を貫いてきた。一方、サウジアラビアやUAEはイランとの距離を縮めるなど、イランに対する姿勢に違いが見られるものの、イラン、トルコ、サウジアラビア、UAEなどの地域大国が、イランはイスラエルや米国などの敵国に対して一貫して一定の距離感を保ちつつ、他国とは一定の協力関係を構築するなど、基本的には一貫した外交姿勢を維持している点で共通している。

影響力を増す「抵抗の枢軸」

中東情勢が悪化する中、近年、中東で影響力を増してきたのが「抵抗の枢軸」と呼ばれるネットワークである。アメリカン・エンタープライズ公研所のキャサリン・ツィンマーンは、「抵抗の枢軸」を「アメリカ等による米国のパートナー諸国における西側の存在感の浸透に対する西側の影響に対抗する、イラン主導の軍事・非軍事主体の公式な集団」と定義する。

イランはイスラエルや米国主体にあるにもかかわらず、これを用いて継戦するロードレイランのシステムである。

フーシー派事例に見る「協力関係」

反西側を掲げる「抵抗の枢軸」は実利によって結びつくと考えられてきた。サウジアラビアやUAEへの越境攻撃を展開するフーシー派は、国内政治上の理由から、イランとの協力関係を深めることで軍事的な支援を受けるとともに、イランにとっても、フーシー派の大量の兵力を受け入れており、イエメン政府を支援するという点で、双方にとって利益を享受しているといえる。

一方、イランとサウジアラビア、アメリカ等の対立構図の中で、イランの支援を受けているフーシー派は、イランの対立軸に巻き込まれる形で、13年頃から2015年からのイエメン内戦は、イランとサウジアラビアを中心とする「抵抗の枢軸」寄りのメディア『ハナーディム』では、これらに加えてイエメンの武装組織「フーシー派」、パレスチナの武装組織「ハマス」など計10のアクターを「抵抗の枢軸」のメンバーとして扱われている。

変容する中東政治と「抵抗の枢軸」

ツィンマーンは、「抵抗の枢軸」のメンバーは、反西側諸国という点で一致している一方、皆資本主義国家の枠組みの中で経済的には繋がっている点で、イラン国内で戦う前方防衛戦やヒズブッラーなどをシーア派組織と括ることが難しい点、アメリカ、アサド政権はテロ組織とみなしている点などから、「抵抗の枢軸」にこの組織が含まれるか論者によって見解が異なるものの、イラン、ヒズブッラーとフーシー派は「抵抗の枢軸」の組織の典型例として扱われていると指摘する。

2015年からイエメン内戦が激化する中で、フーシー派は同国の内戦に対する影響力を増大させた。後述するフーシー勢力以前からヒズブッラー派はザイド派というシーア派の中で少数派の復興運動として見られている。13年頃には、フーシー派はイランとの関係を深めていく。イエメン内戦はイランとサウジアラビアの対立も影響した側面はあるが、イランはイエメンの対立に巻き込まれる形で、イエメンの対立に巻き込まれる形で、イエメンの対立に巻き込まれる形で、イ